

令和5年木造建築士試験

試験場	受験番号	氏名
	—	

問題集

学科Ⅲ（建築構造）

学科Ⅳ（建築施工）

次の注意事項及び答案用紙の注意事項をよく読んでから始めて下さい。

〔注意事項〕

- この問題集は、学科Ⅲ（建築構造）及び学科Ⅳ（建築施工）で一冊になっています。
- この問題集は、表紙を含めて14枚になっています。
- この問題集は、計算等に使用しても差しつかえありません。
- 問題は、全て五肢択一式です。
- 解答は、各問題とも一つだけ答案用紙の解答欄に所定の要領ではっきりとマークして下さい。
- 解答に当たっての留意事項は、下記の(1)及び(2)のとおりです。
 - 適用すべき法令については、令和5年1月1日現在において施行されているものとします。
 - 地方公共団体の条例については、考慮しないものとします。
- この問題集については、試験終了まで試験室に在室した者に限り、持ち帰りを認めます。
(中途退出者については、持ち帰りを禁止します。)

学科Ⅲ（建築構造）

〔No. 1〕 木造建築物に作用する荷重及び外力に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 固定荷重は、建築物を構成している構造材や仕上げ材等による荷重である。
2. 床の単位面積当たりの積載荷重は、一般に、「店舗の売場」より「住宅の居室」のほうが大きい。
3. 雪下ろしを行う慣習のある地方において、所定の垂直積雪量を減らして積雪荷重を計算した建築物については、その出入口等に軽減の実況等を表示する。
4. 積載荷重は、床、梁、柱等の構造計算の対象に応じた値とする。
5. 基礎に作用する外力には、土圧、水圧等がある。

〔No. 2〕 木造建築物に作用する地震力及び風による水平力に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 地震力は、地盤の種類(性質)には影響されない。
2. 地震時の建築物の揺れは、一般に、地上部分より地下部分のほうが小さい。
3. 風圧力を計算する時に用いる風力係数は、一般に、建築物の形状により決まる値である。
4. 風による水平力は、見付面積が大きいほど大きい。
5. 地震力と風による水平力は、一般に、同時に作用しないものとして考える。

〔No. 3〕 木造建築物における部材等とそれを使用する部位等との組合せとして、最も不適当なものは、次のうちどれか。

1. 棟木 ————— 小屋組
2. 下見板 ————— 外壁
3. 胴貫 ————— 軸組
4. 飛梁 ————— 床組
5. フーチング ——— 布基礎

〔No. 4〕 木造2階建ての建築物における基礎又は地盤に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 地盤の長期許容応力度が 15 kN/m^2 であったので、基礎杭を採用した。
2. 基礎断熱工法を採用したので、床下換気孔を設けなかった。
3. 不同沈下のおそれがあったので、べた基礎に代えて、独立基礎とした。
4. 布基礎の底盤の幅を、地盤の長期許容応力度(地耐力)に応じて定めた。
5. 布基礎の立上り部分の高さを、地面から 400 mm とした。

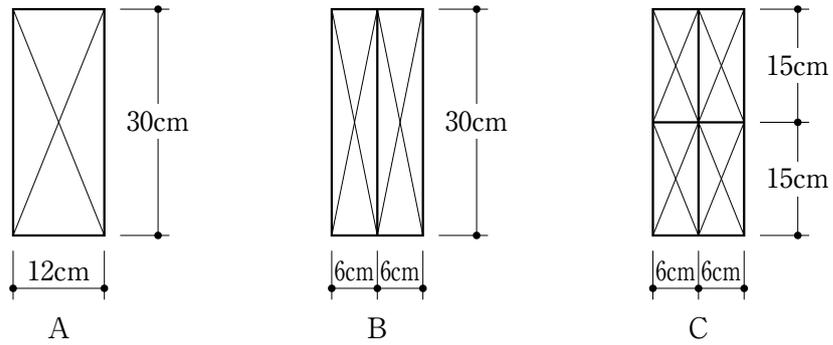
〔No. 5〕 木造軸組工法による2階建ての建築物における土台又はアンカーボルトに関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 土台は、柱脚部を連結し、上部構造からの荷重を基礎に伝えるようにした。
2. 土台切れの箇所に、アンカーボルトを設置した。
3. 引抜力が生じる柱から 300 mm 以上離れた位置に、アンカーボルトを設置した。
4. アンカーボルトに用いる角座金の寸法は、アンカーボルトの軸径、土台へのめり込みを考慮して決定した。
5. アンカーボルトの土台への締付けに当たり、アンカーボルトの先端は、土台の上端において、ナットからねじが3山以上突き出るようにした。

〔No. 6〕 木造軸組工法による建築物の柱又は横架材に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 梁の横座屈を防止するためには、梁幅を大きくするより梁せいを大きくするほうが効果的である。
2. 床梁の中央部付近の上端に切欠きを設ける場合、床梁の有効な断面は、切欠きを除いた部分の断面(正味断面)とすることができる。
3. 管柱は、構造耐力上主要な部材である。
4. 小屋梁に丸太を用いる場合、所要断面は、丸太の末口寸法において確保する。
5. 母屋の継手は、小屋束間の中央部付近を避けて設ける。

[No. 7] 図のような断面を有する製材(木材)の梁A～Cに鉛直力が作用するときの曲げ強さの大小関係として、正しいものは、次のうちどれか。ただし、全ての梁の材質、支持条件及びスパンは同一とし、梁B、Cを構成する部材は、それぞれ相互に接合されていないものとする。

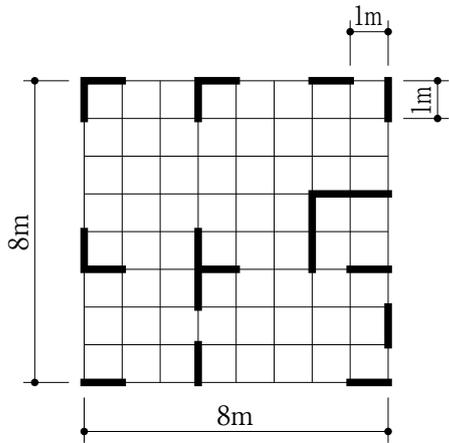


1. $A > B > C$
2. $A = B > C$
3. $B > A > C$
4. $B = C > A$
5. $C > B > A$

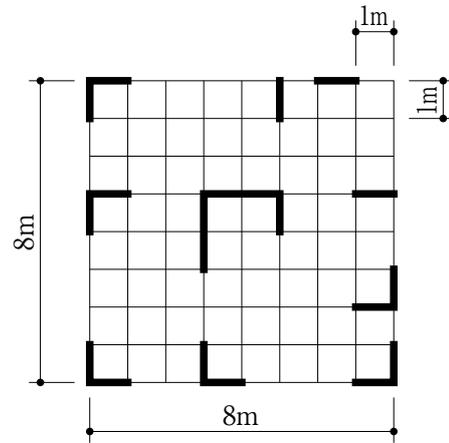
[No. 8] 木造軸組工法による2階建ての建築物において、1階の柱の断面寸法を決める場合、最も重要性の低いものは、次のうちどれか。

1. 壁の種類
2. 屋根葺材の重量
3. 間柱の断面形状
4. 土台上端から胴差下端までの垂直距離
5. 梁の架け方(配置や方向)

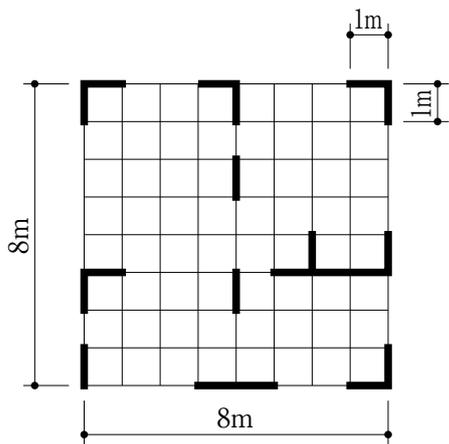
〔No. 9〕 木造軸組工法による平家建ての建築物において、図に示す平面の耐力壁(図中の太線)の配置として、最も不適当なものは、次のうちどれか。ただし、屋根は日本瓦葺(地震力に対する必要壁率は 15 cm/m^2)とし、全ての耐力壁の倍率は1とする。



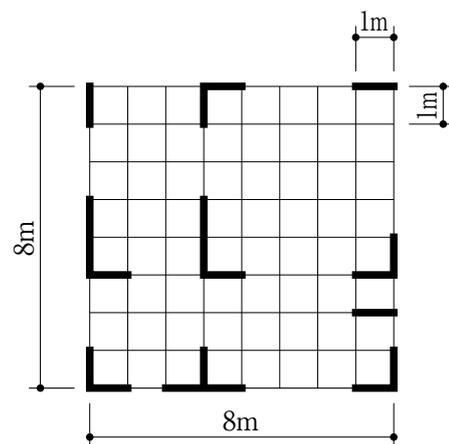
1.



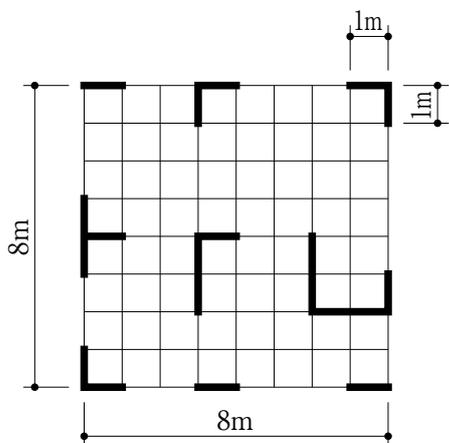
2.



3.



4.

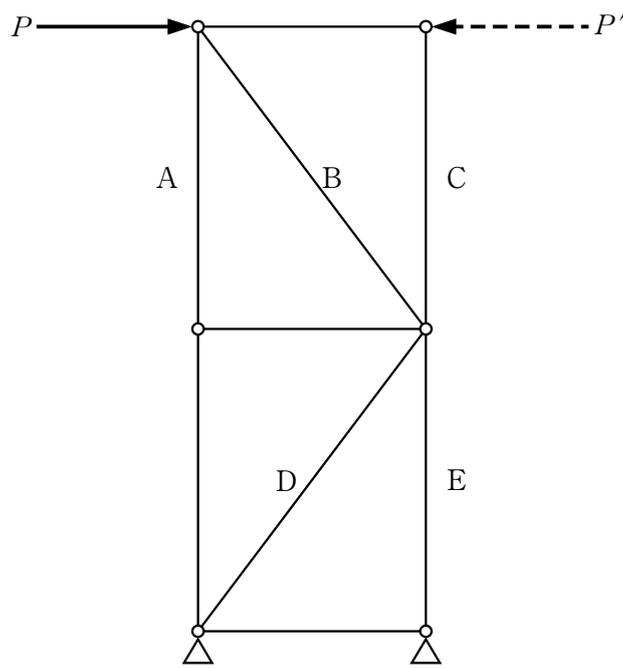


5.

[No. 10] 木造軸組工法による2階建ての建築物の耐力壁に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 耐力壁線相互の距離が8 m以下となるように、各階の平面を計画した。
2. 2階の耐力壁線の位置は、1階の耐力壁線の位置にできるだけ一致するようにした。
3. 平面的な剛性分布のバランスの指標である各階の偏心率が小さくなるように、耐力壁を配置した。
4. 断面寸法が4.5 cm×9 cmの木材の筋かいの端部を、筋かい金物(BP-2と同等の耐力が認められた金物)を用いて、軸組に緊結した。
5. 大壁仕様の耐力壁において、構造用面材を同じ面に2枚重ねて釘で打ち付けたので、壁倍率は、1枚で打ち付けた場合の2倍とした。

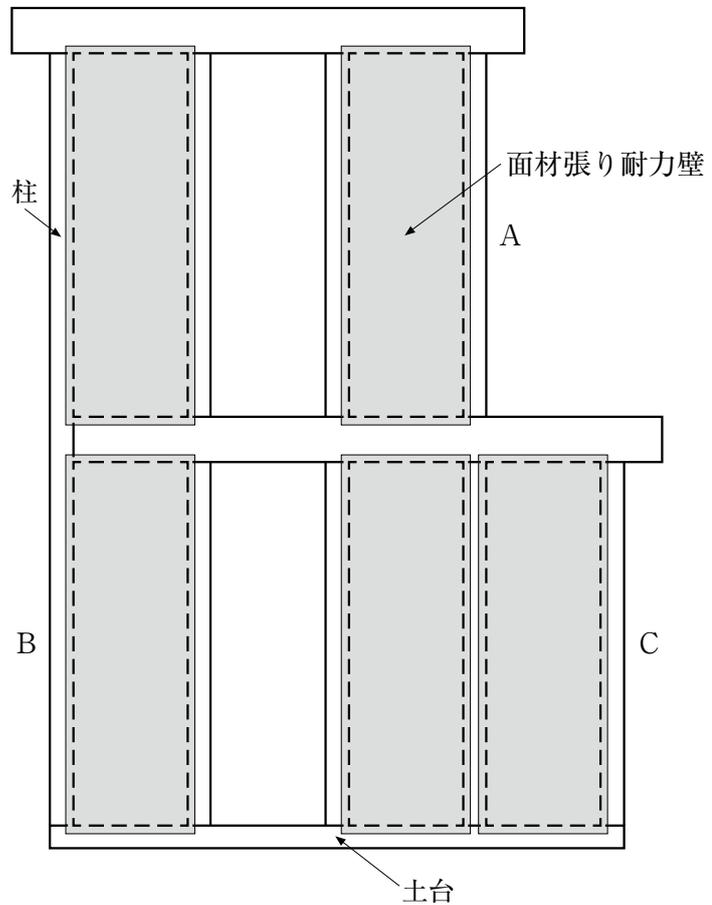
[No. 11] 図のような軸組における部材A～Eについて、水平力 P 又は P' が交互に作用することによって生じる軸力に関する次の記述のうち、誤っているものはどれか。



1. 部材Aには、水平力 P によって、引張力が生じる。
2. 部材Bには、水平力 P' によって、引張力が生じる。
3. 部材Cには、水平力 P' によって、引張力が生じる。
4. 部材Dには、水平力 P によって、引張力が生じる。
5. 部材Eには、水平力 P' によって、引張力が生じる。

[No. 12] 図のような2階建ての木造建築物の耐力壁の配置において、水平力を受けたときに柱A～Cの脚部に生じる引抜力の大小関係として、正しいものは、次のうちどれか。ただし、図中の各部材の接合部には、必要な金物を使用されているものとする。また、耐力壁は面材張り(■部分)で倍率は2.5とする。

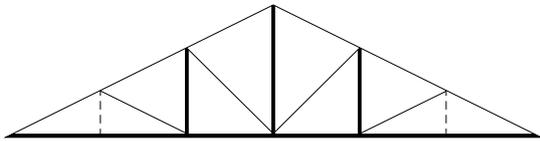
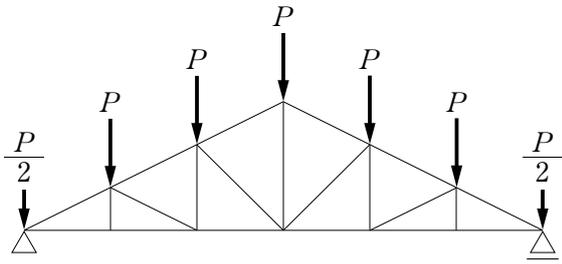
1. $A > B > C$
2. $B > A = C$
3. $B > A > C$
4. $C = A > B$
5. $C > A > B$



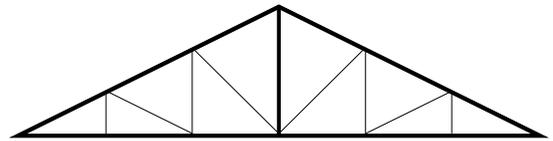
[No. 13] 木造建築物の小屋組に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 小屋組は、風圧力・地震力等の水平力を安全に下部の軸組に伝達できる構造とする。
2. 桔木は、軒の出を深くするために、てこの原理を使って鼻母屋・茅負を先端で支える部材である。
3. 腰折れ屋根の小屋組は、上部と下部とで屋根の勾配が異なるので、小屋裏の空間を確保することができる。
4. 雲筋かいは、小屋組の変形を防ぐために設ける水平材である。
5. 野地板として構造用合板等の面材を用いると、小屋組の横座屈や横倒れを防止する効果がある。

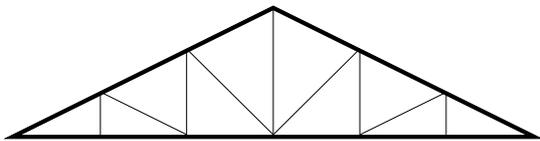
[No. 14] 図のような荷重が作用する洋小屋組において、部材に生じる軸力を示すものとして、正しいものは、次のうちどれか。



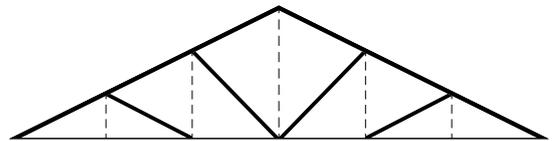
1.



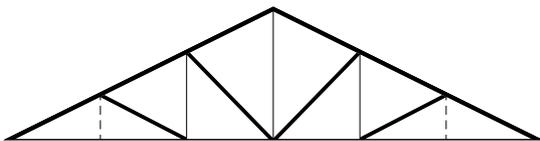
2.



3.



4.



5.

- 圧縮力を受ける部材
- 引張力を受ける部材
- 軸力が生じていない部材

〔No. 15〕 木造軸組工法による建築物の床組に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 1階の床組の床束を張り間方向及び桁行方向ともに910mm間隔に配置したので、大引の断面寸法を幅90mm×せい90mmとした。
2. 2階の床組に根太を用いず、床梁を910mm間隔に配置したので、厚さ15mmの構造用合板を四周釘打ちした。
3. 火打梁を用いた2階の床の水平剛性を確保するために、床梁のせいを240mmとし、床面積に対する火打梁1本当たりの負担面積が 2.5m^2 以下となるようにした。
4. 2階の床梁の間隔が1,820mmであったので、根太の断面寸法を幅45mm×せい105mmとした。
5. 2階の床組の張り間が4,550mmであったので、床梁と根太で構成する梁床とした。

〔No. 16〕 枠組壁工法による2階建ての建築物に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。ただし、構造計算は行わないものとする。

1. 耐力壁線相互の距離を12mとし、耐力壁線により囲まれた部分の水平投影面積を 80m^2 とした。
2. 長さ5mの耐力壁線に、幅3mの開口部を設けた。
3. 耐力壁線に設ける幅900mmの開口部の上部にまぐさを設け、たて枠と同じ寸法型式のまぐさ受けで支えた。
4. 各耐力壁の隅角部及び交差部には、それぞれ3本以上のたて枠を用いた。
5. 小屋組が鉛直荷重によって横に広がるのを防止するために、垂木に垂木つなぎを設けた。

〔No. 17〕 木造軸組工法による2階建ての建築物の構造計画に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 2階をオーバーハングにしたので、当該部分の重量の増加を考慮して、1階の壁量を増す計画とした。
2. 敷地が軟弱地盤であったので、建築物に配置する耐力壁の量を1.5倍とした。
3. 2階の耐力壁の位置と1階の耐力壁の位置が、市松状になるように配置した。
4. 軸組に方づえを設けて水平力に抵抗させることとしたので、柱が先行破壊しないことを確認した。
5. 耐震性を考慮して、広い室を2階ではなく1階に設ける計画とした。

〔No. 18〕 木造軸組工法による2階建ての既存建築物の耐震性を向上させる方法として、一般に、最も効果の低いものは、次のうちどれか。

1. 無筋コンクリートの布基礎のひび割れを、モルタルを用いて補修した。
2. 屋根葺材を、日本瓦から金属屋根葺材に葺き替えた。
3. 耐力壁を構成する柱の劣化部分を根継ぎにより交換し、当該接合部を接合金物で補強した。
4. 大きな吹抜け部分を、構造用合板を張り付けたキャットウォークを用いて補強した。
5. 耐力壁を構成する1階柱の柱脚部と土台とを、接合金物で補強した。

〔No. 19〕 木造建築物の各部における鉛直荷重による力の流れとして、最も不適当なものは、次のうちどれか。

1. 1階床荷重(東立て床・べた基礎)
床板 → 根太 → 大引 → 鋼製床束 → 基礎スラブ
2. 2階床荷重(梁床)
床板 → 根太 → 床梁 → 胴差 → 柱
3. 2階天井荷重
天井板 → 野縁 → 野縁受 → 吊木 → 吊木受 → 小屋梁
4. 屋根荷重(和小屋京呂組)
野地板 → 垂木 → 母屋 → 小屋束 → 小屋梁 → 軒桁 → 柱
5. 屋根荷重(洋小屋)
野地板 → 垂木 → 母屋 → 合掌 → 敷桁 → 陸梁 → 柱

〔No. 20〕 木材の強度に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 根太などの並列材に構造用合板等の面材を張り付ける場合には、その並列材の曲げに対する基準強度を割り増しすることができる。
2. 集成材のめり込みに対する基準強度は、樹種によって規定されている。
3. 一般に、曲げヤング係数が大きい木材ほど、曲げ強度が高い。
4. 木材の含水率が繊維飽和点以下の場合、含水率の低下に伴って強度は小さくなる。
5. 木材の繊維方向の実大材の曲げ、引張り、せん断の基準強度の大小関係は、一般に、曲げ > 引張り > せん断である。

〔No. 21〕 木材の一般的な性質に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 木材のクリープによる横架材の曲げ変形の増加量は、一般に、未乾燥材より乾燥材のほうが大きい。
2. 木材の熱伝導率は、普通コンクリートの熱伝導率に比べて小さい。
3. 断面が大きい集成材の炭化速度は、1分間に0.6mm程度である。
4. 木材の年輪は、木の成長速度が「春から夏にかけて」と「夏から秋にかけて」で異なることによって生じる。
5. 材面に占める節の割合が大きい製材の曲げ強度は、一般に、節の割合が小さい製材の曲げ強度に比べて小さい。

〔No. 22〕 木質材料に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 「フローリングの日本農林規格」において、フローリングは、ホルムアルデヒド放散量の大小によって性能区分されている。
2. 「枠組壁工法構造用製材及び枠組壁工法構造用たて継ぎ材の日本農林規格」における乙種枠組材は、主として高い曲げ性能を必要とする部分に使用するものである。
3. 「集成材の日本農林規格」における接着の程度の表示が「使用環境A」である集成材は、直接外気にさらされる環境で使用することができる。
4. 「製材の日本農林規格」における甲種構造材には、木口の寸法によって甲種Ⅰと甲種Ⅱとがある。
5. 木質接着成形軸材料は、木材の単板を積層接着、又は木材の小片を集成接着した軸材である。

〔No. 23〕 木造建築物の防腐・防蟻等に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 接合金物の腐食による強度低下を防止するためには、溶融亜鉛めっき等の防錆^{せい}処理を施した金物を使用する。
2. 表面塗布による木材への防腐処理は、一般に、加圧式防腐処理に比べて、その効果の継続時間が短い。
3. 集成材は、積層する前のラミナに加圧式保存処理として木材保存剤を注入することにより、全層に木材保存剤を浸潤することができる。
4. 土台は、他の部材よりも手厚い劣化対策が必要であり、水切りの設置も土台の劣化対策の一つである。
5. ヒラタキクイムシは、スプルース等の針葉樹の部材を食害する。

〔No. 24〕 鉄筋コンクリートに関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. スランプ値は、スランプコーンを引き上げた時のコンクリート中央部の下がり量で表される。
2. 異形鉄筋の呼び名であるD10などに用いられる数値は、一般に、公称直径の寸法(mm)を四捨五入して整数で表したものである。
3. 常温時におけるコンクリートの線膨張係数は、鉄筋の線膨張係数とほぼ等しい。
4. 呼び強度が24のレディーミクストコンクリートは、 24 N/mm^2 以上の引張強度を保証するものである。
5. 骨材、水及び混和材料は、鉄筋を錆させ、又はコンクリートの凝結及び硬化を防げるような酸、塩、有機物等を含まないものとする。

〔No. 25〕 建築材料に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. JISにおける粘土がわらには、J形、S形、F形の3種類が規定されている。
2. MDF(ミディアムデンシティファイバーボード)は、材質が均質で表面が平滑であり、加工性にも優れているので、下地材として広く使用される。
3. せっこうボードは、せっこうを芯として両面をボード用原紙で被覆したものであり、一般に、防火性は低い。
4. アルミニウムは、アルカリに弱いので、コンクリートに直接埋め込んではならない。
5. 発泡プラスチック系断熱材には、あらかじめ発泡させて板状とした製品と、施工現場で発泡させて用いるものがある。

学科Ⅳ（建築施工）

〔N o. 1〕 建築工事の管理等に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 高さが5 mの単管足場の組立て作業に当たって、作業主任者を選任した。
2. 材料・部材・部品を受け入れるに当たって、設計図書に適合していることを証明するものがなかったため、工事現場に搬入しなかった。
3. 高さが3 mの作業場所から不要な資材を投下するに当たって、資材が飛散するおそれ[・]_・がなかったため、投下設備を設けなかった。
4. 施工者は、設計図書に指定がない工事の施工方法で工事の品質に大きな影響を及ぼすものについては、工事監理者と十分に協議して決定した。
5. 縄張りには、工事監理者が立ち会い、建築主は立ち会わなかった。

〔N o. 2〕 木造2階建て住宅の建築工事現場における仮設工事に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 建方作業に、ラフテレーンクレーンを使用した。
2. 仮設工事計画書は、施工者が作成して保管した。
3. 枠組足場において、墜落防止のために、交差筋かい及び高さ30 cmの位置に下棧を設けた。
4. くさび緊結式足場の壁つなぎの間隔は、垂直方向、水平方向ともに5 mとした。
5. 単管足場において、地盤面からの高さが3.8 mの位置に設ける作業床の幅を、30 cmとした。

〔N o. 3〕 木造2階建て住宅における土工事、地業工事等に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 捨てコンクリートの上に基礎の墨出しを行った。
2. 地業に用いる碎石は、割りやすいように軟質なものとした。
3. べた基礎を採用したので、総掘りとして、建築物の下部を全面にわたって掘削した。
4. スクリューウエイト貫入試験(旧スウェーデン式サウンディング試験)による地盤調査を実施し、計測は建築物の4隅付近を含め4点以上で調査を行った。
5. 遣方^{やりかた}において、水杭に取り付けた水貫の上端を高さの基準とした。

〔No. 4〕 木造2階建て住宅におけるべた基礎工事に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 基礎の上にねこ土台を設けたので、外周部の土台の全周にわたって、1 m当たり有効面積75 cm²以上の換気孔を設けた。
2. コンクリート打込み後1日間は、その上を歩行しないようにした。
3. 床下防湿措置としての防湿フィルムを設置しなかった。
4. 基礎スラブ面は、建築物周囲の地盤より50 mm高くした。
5. 底盤に設ける水抜き孔は、工事完了後もふさがずにそのまま使用した。

〔No. 5〕 木造住宅における木材の一般的な使い方に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 柱は、末口を上にして使用した。
2. 心去りの化粧柱は、背割りを入れて使用した。
3. 敷居は、木表を上にして使用した。
4. 梁は、背を上にして使用した。
5. 大引は、背を下にして使用した。

〔No. 6〕 木材の木取り等とそれを使用する部位との組合せとして、最も不適当なものは、次のうちどれか。

1. 四方柱材 ————— 小屋梁
2. 山形板目材 ————— 天井板
3. 磨き丸太 ————— 床柱^{とこ}
4. 心持ち材 ————— 土台
5. 杢目材^{もく} ————— 床板^{とこ}

〔N o. 7〕 木造軸組工法の施工順序として、最も不適当なものは、次のうちどれか。

1. 地業
縄張り → 遣方^{やりかた} → 根切り → 砂利地業 → 捨てコンクリート打設
2. 土台
側土台 → 間仕切土台 → アンカーボルトの締付け → 火打土台
3. 建方
軸組の建込み → 仮筋かい → 建入れ直し → 本筋かい
4. 1階床組
土台 → 床束 → 根がらみ貫 → 大引 → 根太
5. 内壁
間柱 → 断熱材 → 壁下地材 → 枠材の見切り材

〔N o. 8〕 木造軸組工法における部材と使用する樹種との一般的な組合せとして、最も不適当なものは、次のうちどれか。

1. 上がり^{がまち} 框 ————— ナラ
2. 膳板 ————— スギ
3. 母屋^{もや} ————— ベイマツ
4. 小屋梁 ————— スプルー
5. 縁甲板 ————— チーク

〔N o. 9〕 木造2階建て住宅における合板等の施工に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 屋根の野地板として、厚さ12mmのパーティクルボードを用いた。
2. 床板張りの合板下地板は、板の長手方向が根太と平行になるように張り付け、釘打ちした。
3. 真壁造の構造用面材として、特類で厚さ7.5mmの構造用合板を用いた。
4. 真壁造の構造用面材の受け材の断面寸法は、30mm×45mmとした。
5. 大壁造の面材耐力壁において、せっこうボードの留付けに当たり、釘打ちの間隔を150mmとした。

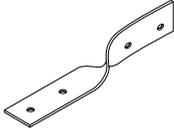
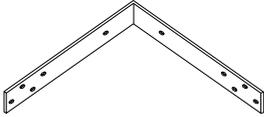
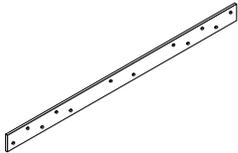
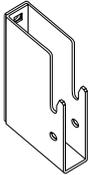
〔No. 10〕 木造軸組工法における各部材の接合部に用いられる継手とその名称との組合せとして、最も不適当なものは、次のうちどれか。

1. 母屋 ^{もや} ————— そぎ継ぎ
2. 柱の根継ぎ ————— 金輪継ぎ
3. 竿縁 ————— ^{いすか} 鴟継ぎ
4. 梁 ————— 追掛け大栓継ぎ
5. 小屋梁 ————— 台持ち継ぎ

〔No. 11〕 木造軸組工法における各部材の接合部に用いられる仕口とその名称との組合せとして、最も不適当なものは、次のうちどれか。

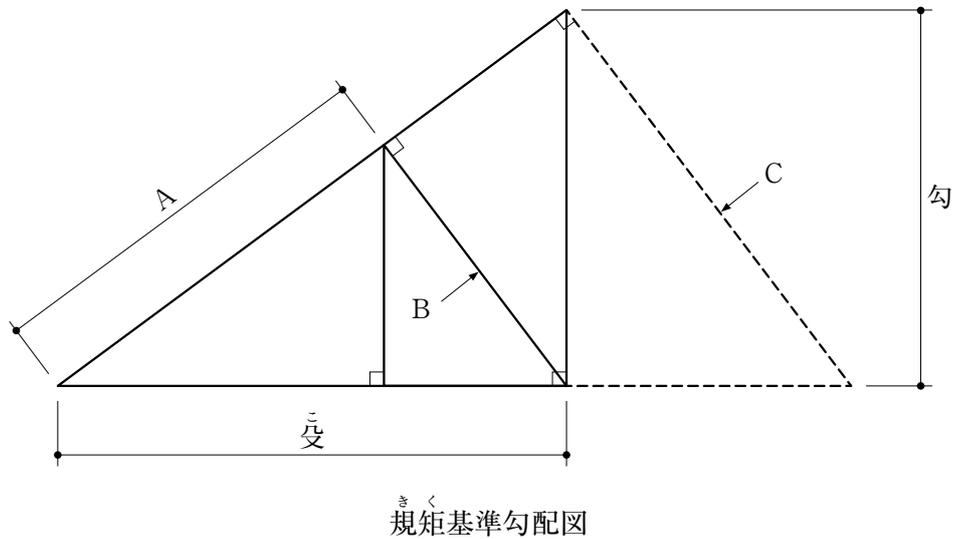
1. 柱と桁 ————— 長ほぞ差し込み栓打ち
2. 折置き ————— 重ほぞ
3. 桁と小屋梁 ————— 渡りあご
4. 土台T字部 ————— 大入れ蟻掛け
5. 土台と隅柱 ————— 大入れ小根ほぞ差し

〔N o. 12〕 木造軸組工法において用いる接合金物の種類、形状及び主な用途の組合せとして、最も不適当なものは、次のうちどれか。ただし、図で示した金物の形状は、用途別に複数あるサイズのうちから、一例を示したものである。

種類	形状	主な用途
1. 折曲げ金物	(ST-12) 	根太と大引きとの接合
2. かね折り金物	(SA・S) 	隅部の通し柱と胴差との接合
3. ホールダウン金物 (引寄せ金物)	(HD-B15) 	基礎と柱との接合
4. ひら金物	(SM-40) 	上下階の管柱相互の接合
5. 梁受け金物	(BH-195) 	梁と梁との接合

(注) N o. 12については、著作権法上の関係から、その出所等を明示しています。
図の出典：2021年版フラット35対応 木造住宅工事仕様書(住宅金融支援機構)

[No. 13] 規矩基準勾配図における線分A～Cとその名称との組合せとして、正しいものは、次のうちどれか。

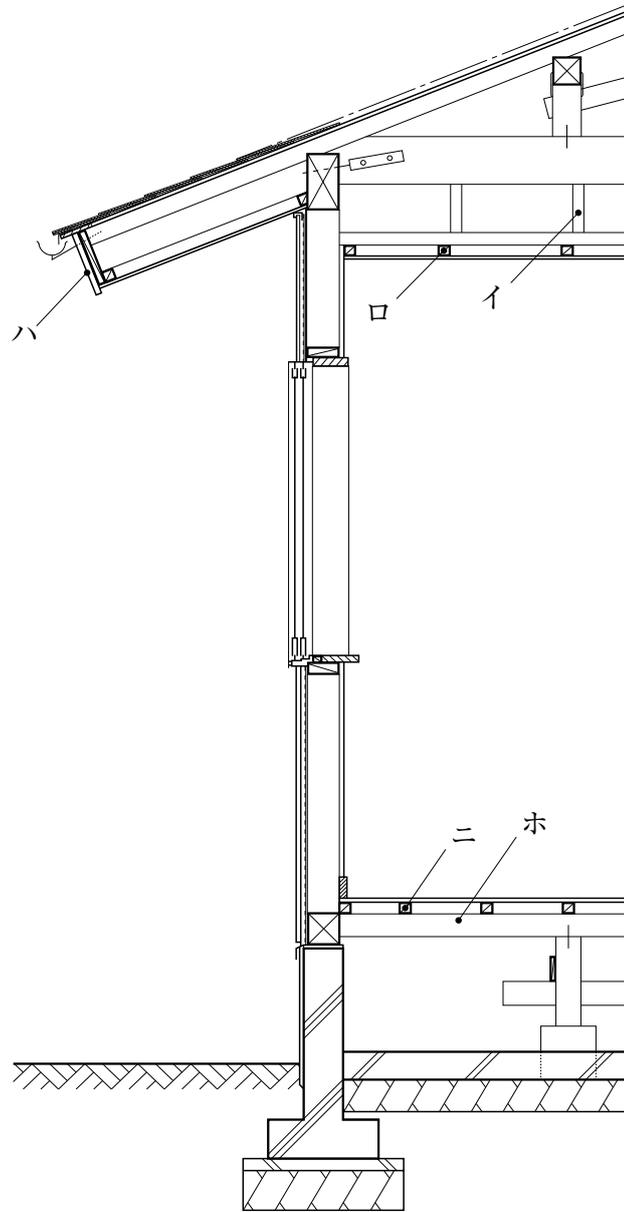


	A	B	C
1.	長玄	中勾	補玄
2.	長玄	補玄	中勾
3.	中勾	欠勾	補玄
4.	補玄	中勾	長玄
5.	補玄	欠勾	中勾

[No. 14] 規矩術における隅木に関係のある勾配又は墨として、最も不適当なものは、次のうちどれか。

1. 落ち掛かり勾配
2. 加弓勾配
3. 入中・本中・出中
4. 配付け垂木胴付き墨
5. たすき墨・馬乗り墨

[No. 16] 図のような木造軸組住宅の矩計図における部材イ～ホの名称として、最も不適当なものは、次のうちどれか。



- 1. イ ————— つり 吊木
- 2. ロ ————— 野縁
- 3. ハ ————— 鼻隠
- 4. ニ ————— 根太
- 5. ホ ————— 土台

[No. 17] 木工事における部材の墨付けに使用する合印とその名称との組合せとして、最も不適当なものは、次のうちどれか。

	合 印	名 称
1.		消し印
2.		間柱心印
3.		水印
4.		切り墨印
5.		心印

〔N o. 18〕 木造住宅における屋根工事及び防水工事に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 屋根の下葺きにおいて、アスファルトルーフィングは、水下側から水上側に向かって張り進め、縦重ねを 100 mmとした。
2. アスファルトルーフィングの棟部分の張付けは、300 mmの左右折り掛けとした。
3. 粘土瓦葺き屋根は、瓦の働き寸法を正確に測定し、瓦割りに従い目通り正しく棟まで葺き上げた。
4. 外部開口部の窓台には、建具を取り付ける前に、先張り防水シートを張り付けた。
5. バルコニーの床防水で、防水層の立上がり高さは、外部開口部の下端部分は 100 mm、それ以外の部分は 200 mmとした。

〔N o. 19〕 木造住宅における左官工事、タイル工事等に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 壁のモルタル塗りに用いる砂は、中塗り用を荒目のもの、上塗り用を細目のものとした。
2. 壁のモルタル塗りにおいて、ラスこすりは、ラスの表面から 1 mm程度の厚さに塗り付けた。
3. 壁タイルの圧着張りにおいて、一般の平壁部分は、上部から下部に張り進めた。
4. 床のタイル張りにおいて、化粧目地詰めは、張付け用モルタルが硬化する前に行った。
5. 外壁の仕上げをモルタル下地ラス張り工法とするので、壁体内通気を可能とする構造とした。

〔N o. 20〕 塗装工事に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 油性ステイン合成樹脂ワニス塗りにおいて、合成樹脂ワニスを塗った後、油性ステイン塗りを行った。
2. 木部の節止めには、セラックニスを用いた。
3. モルタル面への合成樹脂エマルジョンペイント塗りは、特記がなかったので、2回塗りとした。
4. せっこうボード面の素地ごしらえは、汚れや付着物を除去し、パテかいや研磨紙ずりを行った後、全面にシーラーを塗布した。
5. マスチック塗材塗りは、多孔質のハンドローラーを用いて行った。

〔N o. 21〕 木造住宅の建具工事及び内装工事に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 充填断熱工法(はめ込み工法)において、繊維系断熱材を施工するに当たり、防湿フィルムの継手は、木材など下地材の上で 30 mm重ね合わせた。
2. 厚さ 12.5 mmのせっこうボードを木製壁下地に釘打ちするに当たり、釘の長さを 25 mmとした。
3. 竿縁天井の野縁の間隔を 450 mmとした。
4. 木製フラッシュ戸の表面材に用いる普通合板は、特記がなかったので、厚さ 4 mmのものとした。
5. 木製建具の^{かまち} 框と棧の仕口は、特記がなかったので、ほぞ組とし、接着剤を併用して密着させた。

〔N o. 22〕 木造住宅における設備工事に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 配管の施工において、管と管、管と壁などの距離の測定は、管の中心線を基準として行った。
2. 換気用ダクトは、屋内から屋外に向かって、先上がり勾配となるように取り付けた。
3. 給水横走り管は、上向き給水管方式を採用したので、先上がりの均一な勾配で配管した。
4. 排水ますのふたは、プラスチック製のものとした。
5. 排水管の満水試験を行った後、衛生器具を取付け、通水試験を行った。

〔N o. 23〕 建築工事又は測量とそれに用いる機械・器具との組合せとして、最も不適当なものは、次のうちどれか。

1. 合板の釘打ち ————— エアネイラー
2. 防水紙の取付け ————— タッカー
3. 木材の溝付け ————— サンダー
4. 水準測量 ————— 自動レベル
5. トラバース測量 ————— トータルステーション

〔No. 24〕 建築積算に関する次の記述のうち、最も不適当なものはどれか。

1. 設計数量は、設計図書に記載されている個数や設計寸法から求めた正味の数量をいう。
2. 計画数量は、設計図書に基づいた施工計画により求めた数量をいい、仮設、土工等の数量がこれに該当する。
3. 長さ、面積及び体積の単位は、原則として、それぞれm、 m^2 及び m^3 とする。
4. 屋外整理清掃費は、直接工事費に含まれる。
5. シート防水におけるシートの重ね代は、計測の対象としない。

〔No. 25〕 建築工事の設計図書間に相違がある場合の一般的な優先順位(高→低)として、最も適当なものは、次のうちどれか。

1. 特記仕様書 → 標準仕様書 → 現場説明書 → 設計図
2. 特記仕様書 → 現場説明書 → 設計図 → 標準仕様書
3. 設計図 → 現場説明書 → 特記仕様書 → 標準仕様書
4. 現場説明書 → 特記仕様書 → 標準仕様書 → 設計図
5. 現場説明書 → 特記仕様書 → 設計図 → 標準仕様書

